

〈知〉の神話——夏目漱石『それから』論

林 圭 介

0 はじめに

『それから』を「知識人」の物語とする論は多い。代助を「知識人」として読むというわけだ。だが、そうした論においては「知識人」が一般的な像⁽¹⁾として捉えられているために、言説空間における歴史性が隠蔽されることになる。⁽¹⁾では、同時代の複数の言説を再編成する場としてテキストを捉えたとき、『それから』はどのよう⁽²⁾に読み換えることができるだろうか。⁽²⁾

まず「知識人」の物語の枠組みを問い直すことから始めたい。そこには、「知識人」の表象が女性主体である三千代の「内面」を抑圧するという構図が見出せる。代助という男性主体が中心化されることで、女性主体である三千代の物語が周縁に置かれるのだ。その結果、代助と三千代との「自然の愛」⁽³⁾は、たとえ「家」の言説によって相対化されるものだったにせよ、「知識人」を成立させる要

件と化すことになるだろう。「知識人」の物語は、代助の「知識人」らしさに保証をもたらしながら、同時に三千代の「内面」を抑圧する装置としても機能しているからである。

したがって、男性主人公の物語の反措定として女性主人公の物語が析出されることで、女性主体の定立が探られていくことになる⁽⁴⁾。しかし、そこにはある種の転倒が仕掛けられていることも見逃すわけにはいかないだろう。女性主体の物語の再構築が、新たな抑圧の再生産に帰結するからである。男性／女性というジェンダー分割が反復されることによって、女性主体の定立が逆に女性性を困い込む装置となる可能性を孕んでいるのである。

だが、『それから』の読みの枠組みは、物語の再解釈によってより明らかとなるはずだ。それは、「苦惱」や「煩悶」といった「内面」が代助を「知識人」に仕立て上げているのではなく、むしろ、代助を「知識人」として読む一般的な解釈コードが代助の「内面」を生み出していることを暴き出しているからである。表象としての「知

識人」の問題系は、物語の内部と外部の双方において『それから』と「知識人」の物語とが隠喩的な関係で切り結ばれていることにあ
る。

ところが、『それから』において「知識人」という言葉は一度も記
されてはいない。そればかりか「日記」や「書簡」、あるいは、「断
片」に至る全ての漱石テキストにおいてさえ「知識人」という言葉
は登場していないのである。実は、この時期、「知識人」という言葉
そのものがまだ定着していなかったのだ。坂本多加雄の調査によれ
ば、「知識人」という言葉が使われ始めたのは、大正後期から昭和初
期にかけてであるという。「知識人」は、「知識階級」と共にマルク
ス主義の流入や大衆の台頭に伴って使用されるようになった、ロシ
ア語「インテリゲンツィア」の翻訳語なのである。

にもかかわらず、代助は「知」の表象として語られてきた。たと
えば、『それから』が執筆された翌年の明治四十三年、小宮豊隆はす
でに代助を「聡明なる頭脳の為めに、感情の直線の行動を鈍らさ
れ」た「知の人頭の人」として評価している。ここでも「知識人」
の物語が語られるというわけだ。こうした評価が自明なものとして
受け取られることによって、『それから』は漱石テキストにおける
「知識人」の物語の初発として位置付けられてきたのだといえる。

だが、本論で論じたいのは、『それから』と「知識人」の物語との
近接ではない。本論では、『それから』が、同時代の「知」の神話と
強固に結びつくことで、一般的な「知識人」の表象に亀裂を生む、
解釈の普遍性への裏切りを記述したテキストであることを明らかに

したい。歴史的コンテキストへの介入を通して、解釈のイデオロ
ギー性を反転させ、テキストがいかに読み換えられるか、その可能
性を探りたいのである。⁽⁸⁾

1 表象としての「知識人」

代助の「知識人」らしさが何によって保証されるのか、まずテク
ストにおいて代助がどのように語られているか検討したい。

テキストの語りには、語り手に焦点化された言説を通して代助の身
体を語ることから始められている。物語世界内で、眠りから覚める
男として語り起こされる代助は、まず第一に自分の心臓の鼓動を確
かめてみなければすまない、「静かな心臓を想像するに堪へぬ程に、
生きたがる男」として登場しているのだ。⁽⁹⁾このような代助と身体と
の関わりは、新聞に簡単に目を通した後、おもむろに風呂場に向
かった代助の様子からさらに鮮明に浮き彫りにされることになる。

代助は其ふつくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の
前にわが顔を映してゐた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と
一般であつた。実際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ
程に、肉体に誇を置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の様な
骨格と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顔に生まれなかつ
て、まあ可かつたと思ふ位である。其代り人から御洒落と云は
れても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗

り超えてゐる。

(一・傍線引用者、以下同様)

代助に焦点化された言説と語り手に焦点化された言説とが、相互に代助を「旧時代の日本を乗り超えてゐる」新しい男として規定する⁽¹⁰⁾。物語冒頭部分における、二つの代助評価は、身体を通して代助が新しさを獲得している様を写し出している。しかし、たとえはこの身体は、風呂場の中で足だけが自分の上半身から切り離されて「実に見るに堪へない程醜くい」「不思議な動物」のように見えてしまふといった妄想を誘発してしまふような徴としても機能して⁽¹¹⁾いる。代助の身体は、自らの明快な論理の外側で確固としたアイデンティティの崩壊が予測されているのである。

だが、この「柔らかな自我」⁽¹²⁾が崩れゆくのを写し出しているのは「身体」ばかりではない。代助の明快とされる論理の内側においても、代助は自らの二重化した意識を露呈してしまっているのだ。語り手の「内面」を描写する言説によってそれは語られている。たとえば、次のような場合である。

代助が真鍮を以て甘んずる様になつたのは、不意に大きな狂瀾に巻き込まれて、驚ろきの余り、心機一転の結果を来たしたといふ様な、小説じみた歴史を有つてゐる為ではない。全く彼れ自身に特有な思索と観察の力によつて、次第々に鍍金を自分で剥がして来たに過ぎない。代助は此鍍金の大半をもつて、親爺が捺摺り付けたものと信じてゐる。其時分は親爺が金に見え

た。多くの先輩が金に見えた。相当の教育を受けたものは、みな金に見えた。だから自分の鍍金が辛かつた。早く金になりたといと焦つて見た。所が、他のものゝ地金へ、自分の眼光がぢかに打つかる様になつて以後は、それが急に馬鹿な尽力の様に思はれ出した。

(六)

「小説じみた歴史」との遠きから語られる主体化の「歴史」。代助の主体のありようは、語り手によつて語られる「彼自身に特有な思索と観察の力」によつて語られる。だが、「自分の鍍金が辛かつた」という代助の過去は、現在の代助から振り返られたものである以上、その「歴史」を「馬鹿な尽力」として描き出すことはできない。「思索と観察」は、代助の「へいま・ここ」を支える「内面」の「力」ではないからである。にもかかわらず、それが「彼れ自身」の「特有」さとして語られることで代助の主体性は「貫したものとして意味付けされてしまつてゐるのである。

代助の「内面」を語るこのような語りによつて、代助の「知識人」らしさは保証されている。読者の側から言えば、代助の像は、「新しい男」という名付けや、後に「知識人」という統一的な主体として認知されていく存在としては決して描きえない。そうであるにもかかわらず、語り手によつて与えられる「へいま・ここ」への主体化の過程が「知」の表象を可能にしているのである。

再び同時代評を確認すれば、そこでは代助の「知識人」らしさへの信頼感が自然に語られている様を窺うことができる。たとえば、

武者小路実篤は『それから』について次のように述べている。

代助は罪を恐れて罰を恐れることを恥てゐる、卑屈だと思つてゐる。(中略)

代助の悲惨な境遇に落ちたのは、自ら求めて罰を受けやうとしたからである、さうしてその罪は友に対する義侠心から生じたものである。(中略)

この二人の性格は元より境遇によつてつくられてゐる、しかし境遇ばかりでつくられてゐるのではない、代助の境遇に良平を置いたらどうだらうと考へればすぐわかる。代助はノブルな人であるが、良平はノブルな人ではない。

代助が人から偏人あつかひされたのは此優秀な性格から来てゐる、「それから」の悲劇は代助の此優秀なる性格から生じたとも云へる。

(「代助と良平」『東京朝日新聞』明治四十三・四・十一)

武者小路の説明によれば、『それから』が「悲劇」であるのは、「代助」の「優秀なる性格」のためである。「境遇」によつてばかりでなく、「性格」も対比すること、同時代の徳富蘆花の小説の主人公との差異を語る武者小路の議論が正しいかどうかはさしあたって問題ではない。問題は、両テクストの主人公の比較を通して代助を「ノブルな人」と名指してしまふ自然さなのだ。「優秀な性格」だからという理由によつて「ノブルな人」であることが顕彰される代

助。「知識人」といういまだ成立せざる言葉以前に代助は「知」の表象の獲得に成功しているのである。このことは、単行本紹介文における代助評価にも見て取れる。そこでも、代助の「知」は、固く保証されているのだ。

昨年中朝日新聞紙上を賑はした長篇小説である。代助といふ本篇の主人公は一かどの哲学者である。その父や兄や嫂に対する態度やそのフィロソフハイジングが面白い。本篇の特色はこのフィロソフハイジングの点にある、価値も又その点にある、要するに智的分子の勝れた作品ではあるが、現文壇他に匹儔を見ないものである。

(司馬太「新刊紹介」『ホトメギス』明治四十三・三)

『それから』の「特色」と「価値」のどちらにも当てはまるものとして挙げられるのはまたしても「代助」の「フィロソフハイジング」である。「智的分子の優れた作品」として『それから』は評価されるのだ。しかし、これらの評価から明らかなのは、代助の「知」が語り手による代助評価だけでなく、「偏人あつかひ」や「父や兄や嫂に対する態度」といった代助の対他認識からも浮き彫りにされるということである。

したがって、次に代助以外の作中人物に焦点化された言説を検討していかなければならぬだろう。だが、代助に向けられた作中人物たちの眼や耳や声に焦点化された言説は、語り手と代助の信頼関

係を裏切る形で、「知」の表象から外れた場所で読まれる代助の姿を浮かび上がらせるのである。

2 「子供」と「大人」の境界線

たとえば、長井家の父得の次のような言葉は、代助のもうひとつの主体のありようを表わしているように思われる。

老人は頭から代助を小僧視してゐる上に、其返事が何時でも幼氣を失はない、簡単な、世帯離れをした文句なものだから、馬鹿にするうちにも、どうも坊ちやんは成人しても仕様がな
い、困つたものだと言ふ氣になる。

(三)

代助を眼差す父の視線は、「坊ちやん」に対するそれだ。父から見ただ代助は、まだほんの「子供」にすぎないのである。しかも、代助が一家中をことごとく「馬鹿」にしていたのと同じように、代助も「馬鹿」にされるといふ事態が生じている。「馬鹿にするうちにも」「困つたものだ」と思われてしまうほど、代助は「成人」しても「坊ちやん」としか見られてはいないのである。
このような事態は父との対応だけに止まるものではない。兄誠吾も代助を「子供」として見ている。しかも、兄の代助への「子供視」は、兄が直接代助に「子供」と名指す以前から代助自身によつて内面化されているのである。

其日誠吾は中々金を貸して遣らうと云はなかつた。代助も三千代が氣の毒だとか、可哀想だとか云ふ泣言は、可成避ける様にした。自分が三千代に対してこそ、さう云ふ心持もあるが、何も知らない兄を、其所迄連れて行くのには一通りでは駄目だと思ふし、と云つて、無暗にセンチメンタルな文句を口にすれば、兄には馬鹿にされる、ばかりではない、かねて自分を愚弄する様な氣がするので、矢つ張り平生の代助の通りのらくらした所を、彼方へ行つたり此方へ来たりして、飲んでゐた。

(六)

代助を「馬鹿」にし「愚弄」する誠吾。しかし、それは代助の心的表象だ。実際、代助は嫂に向かつて兄を「或点では馬鹿にしない事もない」と語つてもいた。にもかかわらず、兄には何も語りえないばかりではなく、逆に沈黙さえ強いられている。しかも、物語の結末部分では、「貴様は馬鹿だ」と直接罵られてしまうのである。そのとき、兄が口にするのは「今日迄何の爲に教育を受けたのだ」といふ言葉だ。「もう生涯代助には逢はない。何処へ行つて、何をしようとする人の勝手だ。其代り、以来子としても取り扱はない。又親とも思つて呉れるな」という父からの伝令を同時に語る兄は、代助を父同様「子」として扱つていたといえる。兄は「子供」らしさを基準に代助を「馬鹿」にしているのである。

さらに、その「子供」らしさが父や兄といった血縁関係の中でのみ効果を發揮しているのではないことが、平岡との対話から明らか

となる。それは、平岡が東京に戻ってきた後、代助と久しぶりに会話を交わした時にすでに兆している。代助を「子供視」することが語り手によって明かされる以前に、代助自ら次のように語ってしまっているのである。

「僕から云はせると、是程憐れな無経験はないと思ふ。麵麴に關係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麴を離れた水を離れた贅沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない。君は僕をまだ坊つちやんだと考へてゐるらしいが、僕の住んでゐる贅沢な世界では、君よりずつと年長者の積りだ」

(一)

「坊つちやん」と「年長者」。代助の言葉には明確に「子供」と「大人」のレトリックが使われている。代助は、平岡が「子供視」する時に用いていた「世の中」という「大人」の側の視点を自らも内面化しているのである。つまり、平岡が代助を「子供視」していれば、代助も同様に平岡を「子供視」しているというわけなのだ。それは、二人が共に「大人」の視点を共有していることを明かしている。そこにあるのは、「子供」／「大人」という二項対立の関係を自明視する論理である。

重要なことは、他者からなされる「子供」という規定をあえて無視したり、あるいは、他者を一層「子供視」し返そうとする、代助の過剰な反応ぶりにある。代助は他者から「子供」として見られてゐる。と同時に、その他者の視線は代助によって内面化されてもい

る。したがって、内面化が常に反発という形をとってなされる以上、代助が「子供」という他者からの自己同定に強烈に抗っていることは明白だ。この過剰な抗いこそ、代助の「子供」らしさを明確に浮彫りにするのである。代助は、他者の視線によって自らの位置を逆に明かしてしまっているのだ。

それにしても、なぜ代助は繰返し「子供」と「大人」のレトリックを用いて他者の視線を内面化してしまうのか。その理由を探るために、再び代助と父との対話場面を見てみたい。

老人は今斯んなことを云つてゐる。――

「さう人間は自分丈を考へるべきではない。世の中もある。国家もある。少しは人の為になんかしては心持のわるいものだ。御前だつて、さう、ぶら／＼してゐては心持の悪い筈はなからう。そりや、下等社会の無教育のものなら格別だが、最高の教育を受けたものが、決して遊んで居て面白い理由がない。学んだものは、実地に応用して始めて趣味が出るものだか
らな」

(三)

「最高の教育を受けた」人物としての代助の「知」は、「実地に応用して始めて趣味が出るもの」として語られている。「知」は、「最高の教育」という「学歴」によって保証されたステータスとして提示されているのだ。しかし、父がその「学歴」を保持する代助に不満を募らせるのは、「下等社会の無教育のもの」と決定的に異なる

保証を齎すはずの「何か」が明らかに欠如しているからに他ならない。それは、「職業」だ。それゆえ、続けて代助に発せられる「実業が厭なら厭で好い」という父の言葉は、代助に「国民の義務」として「奮発して何か為るが好い」という「何か」、すなわち、「職業」の問題を突き付けているといえる。父の発語は、「最高の教育」という「学歴」が保証するはずの「職業」が代助に兼ね備わっていないことへの苛立ちを示しているのである。

「学歴」という眼に見えない教育資本が「職業」という金銭を媒介とした経済資本へと直結するのを信じて疑わない父。父の言葉においては「学歴」と「職業」との信頼関係が自明なものとして受けとめられている。したがって、同じく父が代助に発する次の言葉に注目しないわけにはいかないだろう。

「身体は丈夫だね」

「二三年このかた風邪を引いた事もありませぬ」

「頭も悪い方ぢやないだらう。学校の成績も可なりだつたんぢやないか」

「まあ左様です」

「夫で遊んでゐるのは勿体ない。あの何とか云つたね、それ御前の所へ善く話しに来た男があるだらう。己も一二度逢つたことがある」

「平岡ですか」

「さう平岡。あの人なぞは、あまり出来の可い方ぢやなかつ

たさうだが、卒業すると、すぐ何処かへ行つたぢやないか」
「其代り失敗つて、もう帰つて来ました」
老人は苦笑を禁じ得なかつた。

(同前)

父の疑問は、「頭も悪い方ぢやなく」「学校の成績も可なりだつた」はずの代助が「遊んでゐる」のに対し、「あまり出来の可い方ぢやなかつたさうだ」といううわさのある平岡の方が「卒業すると、すぐ何処かへ行つた」という、逆転した二人の卒業後の身の振りかたにある。平岡の「出来」の悪さといううわさは、代助の「頭」という「知」の徴を引き立てるものとしてあつたにもかかわらず、実際は平岡が「就職」し、代助が「遊んでゐる」という二人の関係性が「知」の在り方と反比例にあることを父は訝っているのである。父の発語は、「学業成績」までもが「知」の証として卒業後の「就職」と密接に関わり合うという時代の「常識」を逆照射する。平岡の「就職」が友人だから言祝がれるのではなく、友人だから比較されうる対象として代助の「遊んでゐる」現在の状況を非難する徴として提示されるのだ。

そこから見えてくるのは「学歴」だけでなく、「学業成績」までもが「職業」と直結するという信頼の構図である。しかも、平岡は「失敗つて、もう帰つて来ました」という代助に対して、「成功」するには「誠実と熱心」とが不可欠だと答える父の言葉は、「職業」が「成功」を意味する符号でもあつたことを明かすだろう。つまり、父の論理からすれば、「最高の教育」という「学歴」を保持する代助

は、その結果に見合った「職業」に従事しなければならないのである。

3 学歴・成功・神話

次に同時代言説の検討を通して、父の発話に見られる「学歴」と「職業」との相関関係を考察したい。たとえ「教育時論」は、明治四十二年、「学士の就職難」が巻き起こったことを大々的に伝えている⁽¹⁵⁾。一例を挙げれば、同年七月、「学士と奉公口」という記事が、「大学教育の方針として、其卒業生の奉公口を論ずるは愚」であり、「奉公口の有無」を「学士」は問うことなく、「社会は拍手してこれを歓迎すべきである」と報道しているのだ⁽¹⁶⁾。「教育時論」明治四十二年・七・二十五。こうした類の記事は、まさに「就職難」が「青年」全体を巻き込んだ社会問題として現れたことをはっきりと告げている⁽¹⁶⁾。

ところで、このような現象は、日露戦後の特徴でもあった。たとえば、「大学卒業生の近況」という記事がある。同記事によれば、「今より二三年前までは、大学の赤門さへ潜れば学士といふ称号を得て、至る処に歓迎せられ」「無試験」で「参事官」になることができた。『文学士、理学士』でも「高等官」に採用されるなどの待遇だったのが、「今や法学士」が「高等官」になろうとしても、「試験」を受け「欠員」を待つ状況であるという⁽¹⁷⁾（『教育時論』明治三十八・八・五）。一方で教育熱の高まりが伝えられながら、もう一方

では就職できない不況の時代が到来したことが報じられているのだ⁽¹⁷⁾。高等教育の盛況と卒業生の就職難に関する情報が混在するこの時期の様相は、明治四十年代におけるさらなる「就職難」の状況に繋がる下地を準備していたといえる。以後、『教育時論』では、「青年」が就職期を迎える毎年の夏に決まって「就職難」を伝える記事が掲載されていくのである⁽¹⁸⁾。

したがって、「三十になつて遊民として、のらくらしているのは、如何にも不体裁だ」という父の言葉が持つ内実は、明治四十年代における「青年」の「就職難」という状況を的確に把握したものではなかつたのである。なぜなら、父の発話に見られる「学歴」が「職業」と直結するという「知」の神話は、明治四十年代においては実質的な意味を持たなかつたからである。「就職」問題は「学歴」という神話が崩れたところで現われた現象だったので⁽¹⁹⁾。明治四十年代に生じた「学歴」という神話の崩壊は、「知」のシステムを揺るがすと同時に、「就職」問題をさらなる混沌へと追いやる。しかし、その一方で、「青年」の問題として一層浮上していくことになるのである。

したがって、父の発話は、どこかで自らの時代の言葉に囚われた「常識」を代助の前に露呈してしまつていたといえる。つまり、父の発話が代助にある一定の効果を与えないのだとしたら、それは同時代の支配的な言説と重ならない自らの古さを明るみに出してしまつたためなのである。代助は、「学歴」が「就職」と直結しない時代を生きている。たとえばそれが現実問題としては、甚だ危ういものだっ

たとしてもである。

では、「就職難」が社会問題としてメディアを通して報じられていく明治四十年代の事象は「成功」といかに関わっていたのだろうか。⁽²⁰⁾明治四十年以降、本格的に「就職難」が報じられていく中で「成功」の証となったのは他でもなく「就職」だった。ここで『成功』という雑誌の言説に注目したい。

たとえば、井上角五郎は、「春期臨時増刊号」の特集「現代青年への公開状」で、「學術文芸を教へ導くこと」が「教育」であると「誰も彼も了解し」、「青年男女が等しく」「高尚の學術、専門の文芸に競ひ進み、一廉発達したと喜び勇んで居る」状況にあって「此等の教育を受けたものが世の中に出て如何なる働きをなすか」と疑問を呈することで「學歷」と「就職」との間にある信頼性が何の根拠もないことを指摘する（『成功』明治四十二・四・十）。井上が強く主張するのは、「先づ學問を忘れよ」ということである。「学校卒業生は」「何か仕事をさせて見るとツマラぬ事に直ぐ法律論や歴史学を提出す」が、「何でもない一向そんなものゝ力を借らんで分り切つて事にさうするのだ」。「学校卒業生」は「平常に入用がない」のに「仕事」に「學術文芸」を持ち出すというわけである。また、手島精一は、「學生が学校を卒業して愈社会に出ると云ふ時に、屢々処世上の方針を誤る」と述べ、「力量の無い」のに「棒給の高と地位ばかりを望んで事業の先見」には「少しも考へ及ばない」「学校卒業生」を非難する（『卒業生と就職口』『成功』明治三十九・八・一）。さらに、渋沢栄一は、「近時青年の学校生活を経て実世間に立つ者

動もすれば事業に就いて未だ幾何ならざるに忽ち我慢心を起し、自分分は偉いのに相当な地位を呉れぬと」「種々様々の不平を唱へて兎角自己の境遇に対して大なる不平を抱く」と語り（『学校出身者処世神髓』『成功』明治四十・一・十七）、実業道人も「新に学校を卒業して、社会の各所に職業を求められる青年諸君一般の希望は、少しでも待遇の好い所、少しでも地位の高い事、また少しでも仕事の楽な所」にあるかもしれないが、「最早今日の世の中では、中中左様な自由が利かぬ」と語り、「学校の教場で教はつた學問と、活社会の活學問とは大分工合が違つて居る」と「學問」と「就職」との間に大きな亀裂が生じていることを指摘する（『青年就職者心得』『成功』明治四十・一・七・一）。

これらの言葉は、「就職」がもはや「學歷」によって保証されない一種の自立したステータスとなったことを明かしている。しかし、「就職」が、「學歷」が齎す「知」の証から「學歷」に左右されない「成功」の証へとその意味をずらすとき、まさに「就職」が「成功」した者たちから未だ「成功」できぬ者たちへの訓戒と矜持の言説に変貌することに注意したい。そのとき、「成功」の言説は、「就職」する者と「就職」しない者との間に差別と排除の構造を生み出すのである。

たとえば、先述の渋沢勇爵は「唯一身さへ富めば好いと云つて、社会国家を眼中に置かないといふこと」を歎き、「真個の成功者となる」ためには「人格の修養」が必要であることを問い（『成功』明治四十・一・十）、十五銀行頭首の園田孝吉は「職業の選択」におい

て「青年は兎角空想を懐抱し、所謂空中に楼閣を築くが如き希望を有する傾向があるが、空中の楼閣は何時か消滅する虞れ」があるばかりではなく、「却て之が為めに種々の弊害を生じ、心身を毒害する」と語っている（『成功』明治四十二・四・十）。また、東京市長の尾崎行雄は「青年は何故労働を嫌ふ乎」と述べ、「今の青年」に「職業が無い」のは「頻りに官吏、事務員、書記、新聞記者等の如き自由職業に従事し、文筆を以て衣食せんとし、他の労働に服するを嫌つて居るが為」だからで、「若し好んで労働に服するならば職業に至る所に発見せらる」と語るのである（『成功』明治四十二・四・十）。尾崎が「青年」に求めるのは、「旧来の惰眠を打破して、活気の充実を図」ることだ。「現在社会にある青年は社会の中樞を為すものであり、「青年は特に此の活気無くてはならぬ」「活気なくては、個人としても国家としても成功が覚束ない」「是れは非常なる大欠点と言はねばならぬ」と「深く青年諸君の反省を乞」うのである。さらに、早稲田大学学長で法学博士の肩書きを持つ高田早苗は「学校出の青年は何故不平多き乎」と語り（『成功』明治四十二・五・一）、山形東根は「学校卒業生の就職難」を「学校さへ卒業すれば何かになれると信じたる迷夢」から「今も尚ほ醒めやらぬ為め」とし、「高等の学校を卒業して高給を受けんとするは、過去の夢」と一蹴する（『成功』明治四十二・七・一）。したがって、布川静淵のように、「学校卒業すれば直に就職して生活し得ると思ふは既に時勢に後れたる考」であり、「学校卒業の迷信」を捨て「有為の青年学生は学問し又は就職するに、先づ其好む所、楽む所を選

択せよ」と訓戒を垂れる（『成功』「青年職業問題の解決」明治四十二・十・一）。

いずれの書き手も何らかの「肩書き」を持ち、その「肩書き」をもとに読み手に対して一方的に教戒を垂れていることに気付かされる。書き手はその教戒によって自らの特権性と差異性を示し、読み手の内面に柔らかな権力として忍び寄るのである。「就職」情報は、もはや「知」のみが「成功」の鍵となることはなく、「就職」こそが「成功」の証であることを伝えている。それゆえ、未だ「成功」しえぬ者たちは「成功」しえた者たちの言葉に細心の注意を向けながら、常に送り続けられる最新の「就職」情報に目を光らせねばならないだろう。「青年」はこれらの言葉をただひたすら読み続けている。他ない忠実な読者の位置に立たされている。読むことよってのみ「成功」が保証されていく以上、「青年」は常に「成功」した者たちの言葉に耳を傾け、その言葉を受け入れていくしかない。「成功」した者たちの言葉を読む存在としての「青年」は、自らの「学歴」|| 「知」を武器に「成功」を保証されることがないのだ。それゆえ、「青年」は「成功」した書き手の言葉を一方的に受け入れる他ない忠実な読み手として選定されていくことになる。

このように、日露戦争後、次第にクローズアップされて語られていくことになる「就職」という「成功」の「秘訣」は「青年」に読まれるべき言説へと変貌し、従来の「学歴」が「職業」を保証するという「知」の神話を崩壊させる。と同時に、「大人」が「子供」を教育するという事態が「学校」という場を越えて「社会」という場

でも同様に機能していくことになるのである。

したがって、代助が「遊民」として生きることは、ある意味で、「知」の表象の獲得を可能にしていたといえる。代助は、「知」の神話に身を浸さず、ひたすら「大人」に強烈な批判を繰り返していく。「知識人」だからである。しかし、代助は自らの「神経」が「教育」を受けた成果であり、その「教育」によって共通の資本を獲得しているはずの門野との差別化を図る人物でもあるのだ。代助は自ら「大人」の立場に立って、門野を「教育」することを決して否定しようと思わず、仕事もせずぶらぶらしている門野に「外国語」という「知」を身につけることを勧めるという点で、見事に「大人」の振舞いを模倣しているといえよう。

たしかに、代助が「大人」を装うのは、自分と同じく働かない「子供」である門野との接触の際にしか發揮されてはいない。しかし、「大人」の側にいる「就職」する父や兄、そして、同窓の友人たちからも「子供」のレッテルを貼られた時、彼の態度にはそのレッテル付けへの過剰な反応と反抗と否定が繰返されていく。「大人」から教育される「子供」としての「遊民」という位置づけは、「職業」が唯一の「成功」と目された時代の中にあつて「大人」による「大人」の社会システムの完遂への欲望を示している。「大人」は「子供」を取り囲むことによって自らの位置を安定したものに変わっていくのだ。それと同様に代助もまた、その「大人」の位置へと変身することを欲望していたのである。

自らの変化が劇的なものではなかったと語る代助にそれとなく内

面化されていたのは「大人」になることへの欲望である。いつのまにか「金」になることよりも「真鍮」に甘んじていることのほうが自然だと悟った代助は、自分が「三、四年前」と随分変わってしまったことを平岡との再会から認識していた。それが「大人」の社会へと一歩足を踏み入れようとして失敗した平岡との対話から代助に認識されたことであれば、代助の変貌は「大人」になろうとして失敗した平岡とは異なり、自分が「大人」になることを早くから辞退するのを悟っていたところから起こっているものだろう。だから、「大人」の論理を振りかざし、自分を「子供視」する平岡を逆に一層「子供視」しえるのは、代助が平岡の失敗の原因を「大人」になろうとしてなれなかったと分析しているからだ。しかし、代助の認識に一つ欠けているものがあるとしたら、それは「大人」の世界に入り込むことをやめたという代助が、実は、逆に「大人」の世界にすっかり嵌まってしまったことに気付かなかつた点にあるのではないだろうか。

代助が三千代との「恋愛」を選ぶとき、突きつけられた問題としての「就職」は、まさに代助が職業を探しに行くという形で顕在化する。「就職難」は、当時の「青年」の中心的な問題として浮上していたのである。その意味で、『それから』は「知識人」の物語とズレを孕んだ物語として読むことができる。代助もまた当時の「青年」の一人なのである。

注

- (1) 亀井秀雄「言説(空間)論再考」『日本近代文学』第五十六集、一九九七・五
- (2) 「知識人」については、中山昭彦「『間』からのクリティク—『それから』論(『国語国文研究』第九十七集、一九九四・十二)に詳しい。しかし、本論では、「知識人」ではない代助の表象を言説の「遅延」から捉えるのではなく、「知識人」へと構築されていく代助の「主体化」の過程から「知識人」とは異なる「青年」の物語を読むことができることを明らかにしていきたい。
- (3) 石原千秋「反!家族小説としての『それから』」『反転する漱石』青土社、一九九七・十一)は、「恋愛」の物語の中に隠されたもう一つの物語として「家族」の物語を抽出し、「恋愛」が「家」の言説に支えられたものでしかないことを指摘している。本論では、代助と三千代との「恋愛」が「知識人の苦悩」の物語を補充しながら、その読みを強化している点に注目したい。
- (4) このような読解の方向は、フェミニズムの観点から検討されてきた。たとえば、駒沢善美「漱石という人(思想の科学社、一九八七・十)」が代助を「フェミニスト」として評価したことに対し、中山和子「それから」——自然の昔とは何か(『国文学』一九九一・一)は代助こそ三千代の物語を抑圧する装置として機能していることを暴いた。また、小森陽一「漱石の女たち—妹たちの系譜」(『季刊 文学』一九九一・一)は、「本郷文化圏」に生きている「兄」の物語から常に抑圧され、語られなかった「妹」の物語を析出している。それらの試みに対して、生方智子「新しい男」の身体—『それから』の可能性—(『成城国文学』第十四集、一九九八・三)は、代助の「身体」に注目することで文化的に構築された「新しい男」としての代助の「主体化」の過程から新たなフェミニズムの可能性を探っている。本論では、生方論の「主体化」という問題提起を共有したい。ジェンダー分割を与件されたものとしてではなく、それさえも事後的に構築されたものとして捉える立場に立つからだ。
- (5) 『漱石全集 第二十八巻』岩波書店、一九九七・三
- (6) 『知識人 大正・昭和精神史断章』読売新聞社、一九九六・八
- (7) 「それから」を読む『新小説』明治四十三・三。他に、無記名「漱石の『それから』を読む」(『時事新報』明治四十三・一・一八)、無名氏「夏目さんの『それから』を読む(一)〜(四)」(『大阪朝日新聞』明治四十三・一・二十八〜二・一)、東渡生「それから」を読む(『国民新聞』明治四十三・二・二)、「新刊評」『帝國文学』明治四十三・三・十)など枚挙に遑がない。
- (8) 「介入」については、レイ・チョウ「ディアスポラの知識人」(青土社、一九九八・四)を参照。
- (9) 吉田照生「代助の感性—『それから』の一面—」『国語と国文学』一九八一・一。また、一柳廣孝「特権化される「神経」—『それから』の一面—」(『漱石研究』第十号、一九九八・五)は、「身体」との関わりから「神経」描写が代助の評価を形作っていると鋭く指摘している。
- (10) 生方、前掲論文
- (11) 石原、前掲論文
- (12) 石原千秋「漱石の記号学」講談社選書メチエ、一九九九・四
- (13) 佐藤泉「それから」—物語の交代—「季刊 文学」一九九五・十
- (14) 関肇「立志の変容—国木田独步「非凡なる凡人」をめぐる」『日本近代文学』第四十九集、一九九三・十
- (15) 『教育時論』(明治四十二・六・二十五) 同記事によれば、「近時学士の就職難を訴ふる声漸く高く、京都の菊地総長の如きも亦これを憂へて、為めに大学教育の方針をすらも変ずべしと論ぜらるゝに至る」という状況が到来したという。また、同記事に併載されている「高等就職難」を見れば、「我国の現況は、単に前項の如き学士就職難あるのみならず、

中等以上の教育ある人士は、凡べて就職難を訴へつゝあることも報じられている(『教育時論』)。「学士」だけでなく「中等教育」を受けた「教育ある人士」すべてが「就職難」に直面していたのである。

- (16) 北村三子「青年と近代」青年と青年をめぐる言説の系譜学」世織書房一九九八・二

(17) それが日露戦後の慢性的な不況を原因としていることは間違いないが、たとえ、代助が物語世界内で「学校」を卒業したと見られる明治三十八年における「就職」状況は、明治四十二年のそれとは若干異なる様相を呈していた。先の『教育時論』を見てもそこには「就職難」を伝える記事がさほどに散見できないのである。逆に、「帝国教育の盛況」を伝え(『教育時論』明治三十八・四・五)、「就学者増進」を喧伝するという有様なのである(『教育時論』明治三十八・四・二十五)。これらの記事は「我帝国は前古未曾有の時局に遭遇せるに係はらず、至禱の御軫念浅からず、国民の思慮大に高尚したるの結果、「全国各種学校何れも拡張の必要ありて、既に各学校職員を増員を発表し、又女子高等師範学校の如きは、生徒募集定員七十五名に対し、募集約八百名の多きを見たり」と伝え、「各学校就学者の、極めて少なかりし」昨年の戦中状況のなかでは「父兄」が「子女」の「中学校高等女学校」への「入学を猶予」するばかりか「小学校の就学さへ、躊躇するもの」があったが、本年は「時局の際にも不拘、社会が教育の必要を認めて、子弟の教育に意を用ゐる」ようになり、「東京市小学校の如きは、著しく入学者」が「増加」し、そのために「二部教授を設け」ることになったと報じている。日露戦終結直後の教育はまさしく好況の呈を示していたのである。

- (18) たとえば、「高等教育の疏通」(『教育時論』明治三十九・二・二十五)、「新卒業生」(同前、明治四十一・三・二十五)、「青年卒業期」(同前、明治四十一・七・十五)、「不景気歓迎」(同前、明治四十一・七・十五)、「卒業生」(同前、明治四十一・七・二十五)、「高等就職難」(同前、明治

四十二・六・二十五)、「学士と奉公口」(同前、明治四十二・七・二十五)、「高等教育卒業生」(同前、明治四十三・七・十五)、「堀尾石峰」(卒業生の就職と教育」(同前、明治四十四・七・十五)、「高等遊民問題」(同前、明治四十四・七・十五)、「洪澤栄一」(最近の商況と卒業生」(同前、明治四十四・七・二十五)、「浪人者の成行」(同前、明治四十四・十二・十五)と挙げれば枚挙に遑がない。

- (19) 天野郁夫の『学歴の社会史―教育と日本の近代―』(新潮社、一九九二・十一)が指摘するように、「個人の学校と教育に関する履歴」としての「学歴」が「明治三十年代」に「個人的なものから社会的なものに変わる」ことによって「学歴社会の原型」が生み出されたが、そのシステムの形成が完了したと考えられる大正期に入る直前の明治四十年代、「学歴」はその完成までに微妙な揺れを生じさせていたように思える。

- (20) 雨田英一「近代日本の青年と「成功」・学歴」雑誌『成功』の「記者と読者」欄の世界」『学習院文学部研究年報』第三十五輯、一九八八・三

付記 『それから』本文の引用は『漱石全集・第八巻』(岩波書店、一九五〇・一)に拠った。なお、引用文はすべて、ルビを省略し、旧字を新字に改めた。

(はやし・けいすけ 成城大学大学院博士課程前期)